

作品タイトル

観音崎

元にした作品のタイトル（あれば）

なし

著者名

藤川 むとかず  
六十一

150文字以内のあらすじ

独り暮らしの母と、観音崎へ行った。

小さな女の子が、道案内をしたり、坂道で

母の足を心配したり、随分親切にしてくれた。

母が近くの小学校の先生をしていた時、生

徒がドクウツギという毒草を食べて死んだ。

初めて聞く話だ。その子が生まれ変わって、

来てくれた。母は、そう思って、涙を浮かべ

ていた。

本編の文字数

4,691字

父の死後、故郷に一人残る母の様子を確かめ、不自由な身体になった母には手に余る力仕事をやる為、月に一回ほど帰っている。この日は、盆栽の植え替えと父の残した大量の書類の整理をして、お昼になった。

母の作った質素な食事をとりながら、「今日は、仕事が少なかったな。もういいのと確かめる。よく考えれば、他にもするところは色々あるのだが。」

「今日は、もういいよ」  
やれやれ、終わった。期待していた言葉で、ほっとした。

「じゃ、ドライブでも行こうか」  
そんな言葉が自然に出てくるような、五月晴れそのものと言うべき絶好の日であった。「いいね。気分転換になる」

母も嬉しそうであった。  
「どこへ行く？」

母は、家にある少しの駄菓子と飲み物を使い古した手提げ袋に入れながら、

「観音崎へ行ってみたい」

と答えた。

観音崎は能登半島の中ほど、能登島が浮かぶ七尾湾の出入り口に南から伸びる崎山半島、その先端に位置する岬で、その名の通り観音様を祀った社と灯台がある。昔は、随分不便なところだったらしい。しかし、今は、火力発電所が出来たおかげで、道路がとても良くなっている。

土曜日の午後だが、車の数は少ない。空に一点の雲もなく、草木を揺るがすほどの風もなく、明快な日差しが降り注ぎ、左手に広がる七尾湾は鏡のように滑らかだ。反対の穏やかな形の山の新緑も、鮮やかに萌え輝き、清新な気分をもたらしてくれる。しばらく走ると、母が目を山の方に向け、懸命に何かを探していることに気づいた。

やがて、

「あっ、ここだ。停めて！」

と、母が叫んだ。

すぐに、車を脇に寄せて停止する。母が低い山の間を登る狭い道を指差している。まるで獣道で、とても車が走れるようなものではない。

「昔、教師に採用されて、江泊<sup>えのとまり</sup>小学校にいた頃、この道を歩いて家へ戻った」

家というのは、今の家ではなく、七尾市の隣の町、鹿島町の実家のことである。

「昔って、いつ頃のことだ？」

「そうだね。昭和8年から14年の頃かな」  
車を停止させたまま、母の横顔を見る。その目は、山の間を登る狭い道に釘付けとなっていたままだ。

「土曜日の午後になると、三里の山道を歩き続けて七尾へ入り、バスで家へ帰った。次の日曜日には11時に家を出て、バスに乗って、七尾港から午後2時発の船で江泊<sup>えのとまり</sup>へ戻った」  
「それじゃ、家にいる時間、あまりないじゃないか。それでも、毎週帰っていたのか」

昔のことを懐かしんでいるのか、少女のよ

うに、何度も首を縦に振った。

母の実家は小さな金物屋をしていたが、貧乏人の子沢山で、生活は苦しく、長女である母も小さい頃から妹達の子守、近くの山で薪取り、畑の草むしり、縫い物等の家事手伝いに加えて、集金とか商売の手伝いまでやらなければならなかった。そんな忙しい中、高等女学校受験の為必死に勉強したが、勉強部屋がなく、二階の物置でむしろを敷いて石炭箱を机にして蠟燭の光で頑張ったそうだ。父親からは、もし落第したら近くの工場へ機織りに行かせると言われていたが、幸いそういうことにはならなかった。

「そんなに家に帰りたかったのか」

再び大きくうなづく。

「恥ずかしくて言いにくいことだが、江泊<sup>えのとまり</sup>へ来たばかりの頃、さびしくて家へ逃げ帰ったことがあった」

「へーっ、そんな話、初めて聞くな。それにしても、子供が登校拒否というのはよくある

話だが、先生が逃げ出すとは：

私のからかい口調に、母が恥ずかしそうにうつむいてしまう。

「その後、どうなった？」

「校長先生が、家まで迎えに来てくれた」

母には悪いが、思わず笑ってしまった。

鵜浦うのうら

の集落が近くなって、道が狭くなった。

小さな女の子が前を子供用の自転車で走っているが、追い越せず、しばらく後ろに付いてゆっくり走った。

小さな広場があった。前は森のように木々が生い茂り、反対側はすぐ海である。

「ここから先、車を止められるかな？」

数台の車が駐車していたが、空きはあった。

「この先は、だめだと思う」

この辺りは、恐らく昔と変わっていないのではないか。母の言葉に従って、そこに車を置いて、歩いていくことにした。

岬の方へ向かって歩いた。道が更に狭くなり、自動車はとても通れない。広場に置いて

きて正解であった。

「どこへ行くの？」

呼び掛けてきたのは、先、自転車で走っていた女の子であった。

「観音様」

母がゆっくり答える。

「ああ、お寺へ行くのね。こっちだよ。私も遊びに行くの」

そう言っつて、先に歩く。随分人なつこい子である。言葉も大人びている。

小学校一年か二年くらいだろうか。真ん丸い顔に、髪は短めで、長めのスカートを穿き、いかにも活発そうだ。

再び海辺へ出た。潮のにおいが強い。

海の中に小さな島がある。陸地とは10mばかり離れているが、水は浅い。島へ渡る為に、岩を並べ、その上にコンクリートを打つて歩きやすいようにしてある。

「ほら、魚がいる」

女の子が、指差して教えてくれる。岩の上

を踊るようにぴよんぴよん飛び跳ねている。

「危ないよ。気をつけて」

母が叫ぶ。

「大丈夫」

元気な声が返ってきた。

母も、昔この地で、これくらいの子供を教

えたのだろうか。

島に上がり、急な勾配の石段を登った。

観音堂は小さい。古い建物なのだろうが、

古さはそれほど感じない。

お堂の前に新しい灯籠があり、間に地元で

建てた石碑があった。

かどしま  
鹿渡島

の観音様は、その地名のとおり、太古

の昔、鹿に乗ってこの島に降り立ったと伝え

られ、古くから地元信仰を集めている。こ

の近くの家が交代で毎朝5時半頃観音堂にお

参りする習わしが、ずっと昔から今も続けら

れているそうだ。

戦国時代、七尾とその周辺は畠山氏の所領

であったが、越後の雄上杉謙信に攻められ、

重臣の分裂・裏切りもあって、七尾城が落城し、その後は加賀藩前田家のものとなった。お堂の中に掛けられた「かどしま鹿渡島観音」の扁額は、加賀藩家老、本多政敏が寄進したものであること。

母が、一人でお堂に上がる。しばらくして、話し声が聞こえてきた。相手は母より若そうだ。教え子の消息でも聞いているのか。

「おじちゃん」  
と呼び掛けられ、振り向いた。

女の子が崖下から豆の鞆を取ってきて、上手に笛を吹いてみせる。

「すごいな」  
と、心から感心して誉めると、得意そうにっこり笑う。今では珍しい野性の技だ。付近に、他に人はいない。女の子の笛が止むと、昼をちよつと過ぎた時間とは思えないほど、静かである。

向こうの波打ち際に放り出された古タイヤ

の中に、数匹の子猫がおり、盛んにじゃれあっている。ほとんど音のない風景であった。

やがて、母が出て来た。  
石碑のところで、写真を撮る。

今度は、灯台へ向かう。女の子が付いて来た。まだ案内役を続けるつもりのようなだ。

陸地につながる岩の渡り橋のところで、

「次、どこへ行くの」

と女の子に聞かれ、

「灯台」

と答えると、

「あそこは急だよ。大丈夫？」

と、首を傾け、心配そうに言う。

私も母を見ると、

「この子、私のことを心配してくれているんだね。どうも、ありがとう」

と、真面目な顔つきで言い、丁寧に頭を下げている。

「でも、大丈夫。上がる」

と、しっかり拳を握るしぐさをして、うな

ずいて見せる。

それを見て、女の子が先に走ってゆく。

母と二人でゆっくり歩きながら、

「えらく人なつこい子だな」

と話し掛けると、母が

「ここらは閉ざされた所だから、あんな子が

多い。大人も子供も、余所よそから来た人には、

皆本当に親切にしてくれる」

と説明する。

今は便利になったが、母がいた頃は離島の

ような所であったのだろう。

「ここから急だよ。私でも大変なんだから」

女の子がいつの間にか傍らへ来て、又心配

してくれる。「私でも大変なんだから」には、

思わず笑ってしまった。母が何とか登るのを

見て、再び駆け出していく。

灯台が見えた。白く塗られ、ずんぐりした

形で、かわいい。

灯台の左手に小さな広場があり、紺色の制

服を着た青年が立っていた。私達を見ている。

向こうから軽く頭を下げたので、こちらもすぐに返す。

灯台は、今はどこも無人だが、時々管理に来る人だろうと思った。ふと、昔の灯台守の苦労話を思い出す。

広場へ登ると、そこはまさに絶景であった。富山湾の向こうのはるか彼方に、雲かと思ったら、白銀の山並みの頂であった。

「あーっ、立山連峰だ」

思わず大声を上げた。

制服の青年が、微笑みながら、ゆっくり近づいて来た。

「珍しいですよ。なかなか見られない」

青年が私達に話しかけてくる。背は私と同じくらいで、浅黒い顔にきれいな歯並みが目立つ、締まった体つきの人であった。

「こんなすばらしい風景を見たのは、私も本当に久しぶりです」

「そうですか。運が良かったですね」

制服の名札には、「灯台課 田平」と書か

れていた。海上保安庁の人らしい。

「お婆ちゃん」

先の女の子が走り寄って来た。もう一人友達を連れて来た。ころころした体形の、リュックを背負った女の子だ。

二人とも、何か手に持ったものを母に差し出している。

「ほら、これ。あげる」

差し出したものを見ると、数本の筍の細い先端の部分であった。

「ありがとう」

目を細めて、母が受け取る。

田平さんも笑っている。白い歯がさわやかであった。

「こういうのを取るのも、私達の仕事です。

竹や木が蔓延はびこると、灯台の光が見えなくなり

ますから」

立山連峰を眺めながら、母が

「昔、ここにいた時、立山がよく見える時は、

次の日は雨になる、と聞いた」

と、話す。

空を見渡しても、天気が悪くなる兆候は微塵もない。どこからか小鳥の澄んだ鳴き声が聞こえてくる。

「晴れて欲しいですね」

と、田平さんが、つぶやくように言う。

「明日は観音崎灯台のお祭りです。下の海辺の広場で、バーベキューやったりします」

田平さんはその準備に来たのだろう。

「母が変なこと、言ってしまったって……」

「いえ、構いません。昔からの知恵ですから」

母は立山の方を向いて、平然としている。

「よかったら、明日もいらっしゃって下さい」

田平さんに丁寧にお礼を言って、ゆっくり

下へ下りる。女の子達は、遊びに夢中なのか、もう追ってはこなかった。

母は、先程女の子達から貰った筍を、湯気が出ているのではないかと思われるほど、大切そうに握り締めていた。

下の広場に戻った。

車に乗り込み、しばらく走り、小さな遺跡を見物した後、海岸へ出た。

母が、海に目をやったまま、両手を組んで、感慨深げにつぶやいた。

「ここにいた時、児童が二人、山で死んだ。一人は私の担任だったの」

そう言っつて、深くため息をつく。これまで抑えていたものを、一度に吐き出すかのようであった。私は、初めて聞く話である。

「どうして死んだ？」

「ドクウツギという毒草を食べたから。葡萄に似た形で、鮮やかな色をしている」

「∴」

「船で七尾の医者に運んだが、時間がかかり過ぎて、助からなかった。葬式に行つて、色々言われ、つらい思いをした」

母はそれ以上言わなかったが、先程の女の子に「危ないよ」と声を掛けながら、そのことを思い出していたのではないか。昔、死んだ子が生まれ変わつて道案内に来てくれた、

そんなふうに考えていたのではないか。

母が、背筋を精一杯伸ばして、穏やかな海に目をやっっている。若い頃見た眺めと、ほとんど同じ筈だ。

私も海を見る。海も島も山も皆やさしい。そんな能登の風景に自分を委ね、茫然としているのは、とても心地良い。母もきつとそうなのだろう。

それとも、母は、悠久の海の彼方に、過ぎ去ったはるかな時を見ているのであろうか。昔の自分、そして昔の子供達の姿を見ているのであろうか。

母の口もとが、少し動いていた。多分、昔に話しかけているのだ、と思った。

《了》